

飲酒と健康（創作）

氏名（ ）

次の文は高校生の学校生活の一場面を表している短い物語ですが未完成の状態です。そこで、次のキーワード「急性アルコール中毒」「かっこいい」「20歳」を使って自分なりの考えで物語を完成させてください。

途中までの登場人物はA君・B君・C君の3名ですが男性・女性・生徒・先生・店長などなど、必要に応じて登場人物を考えて結構です。

タイトル「 」

ある高校の文化祭が11月中旬に盛大に行なわれた。なかでも3年B組の生徒達は自分で考えた「横浜風たこ焼き」の模擬店で大成功をおさめ、みんなの顔には満足感や成就感でいっぱいの表情がうかがわれた。そんな中、今回の企画を立案しリーダーとして活躍したAが文化祭終了後クラスメイトに打ち上げの話を持ち出した。

「おーい、みんな！本当にお疲れさま～！みんなの協力のお陰で「横浜風たこ焼き」が完売したよ。本当にありがとう！みんなの苦勞をねぎらうのとクラスの更なる団結のためにこれから居酒屋に行こうと思うんだ。全員来てくれるよな」

とAがクラス全員に呼びかけた。それを聞いたB君は仲の良いC君に

B「なあ、今「居酒屋」で打ち上げをやるって言ってたよな」

C「それがどうした？」

B「それがどうしたって、それはまずいでしょ！居酒屋って言ったら酒を飲むんだろ？」

C「だって今時の高校生はみんな平気で居酒屋なんか行ってるぜ。別に平気だよ！」

B「うーん・・・、俺チキンだからなあ」

C「チキン卒業しようぜ B!酒飲めたらかっこいいし！！」

B「えー・・・。だって酒って二十歳からだろ？」

C「そんなもんバレなきゃいいんだよ！」

B「いや・・・いいや、俺はいいよ。カラオケとかなら行くけどさ。居酒屋はまずいって。」

C「なんだよノリ悪いな。なあリーダー！Bが行かないってよ！！」

みんな「うっわーしらけるー」

B「何だって言えよー。だって俺たちそろそろ受験だしさ。こんな時にごやっかいになったらやばいぜ」

A「じゃあいいや。お前もう来なくていいよ。無理強いはいしないし」

B「そうして。調子乗って一気飲みなんかすんなよー。今流行の急性アルコール中毒ってのになるゾー」担任には秘密にして、3年B組の生徒はB君とそのほか数人のクラスメイトを抜いて18時に駅の近くにある居酒屋の前に集合した。

その日が金曜であったためか、お店は少し混んでいたようだ。急にきた団体に店員は少し驚愕したような顔をした後、すぐに眉をひそめた。率先してA君は店員に話しかける。

「28人なんですけど、平気ですか？」

「申し訳ございませんが年齢確認よろしいでしょうか？」

店員にそう尋ねられると、途端に皆視線を忙しく動かす。

言葉に詰まる A に、店員は少し厳しそうな顔をして言った。

「申し訳ございませんが、当店では年齢確認ができなかった場合、入店をお断りしております。」

「…そうですか。それならいいです。」

店に入ることができずに、そのまま彼らはその居酒屋を去った。

「どうすんのさー」

「うーん、じゃあカラオケでも行く？」

ぞろぞろと大人数で道を歩きながらどうするどうしようの会話がされた後、結局無難にカラオケに行くことに決まった。

学校から近いみんながよく行くカラオケに到着すると、名簿に名前と人数を記入して店員さんに案内された部屋は大人数が入ってもまだ余裕が残るほどの広い部屋だった。

どんどんと歌の予約をいれていく。時間はあっという間に過ぎてしまって、いつの間にか一時間が経過しようとしていた。

「そろそろ酒欲しくない!？」

「欲しいー!!」

「何飲むー？」

ドリンクメニューを見ながら、各々決めていく。

その中でもやはり数人はそれを断るが、他の人は構わず自分の飲みたい酒を注文していった。

酒を注文することを断ったクラスメイトはただそれを見るだけで、何も注意はしなかった。

しかし酒を頼んでから15分経っても誰一人として酒がくることはなかった…。なぜなら…。

「なあ、金曜は楽しかったか？」

金曜の打ち上げに参加した女生徒に、やけに出席率の悪い次の週の月曜日に B が問うと、その女生徒は少し顔を歪ませた後、声を小さくして金曜の出来事を B に話し聞かせた。

「実はさ。居酒屋行ったんだけど「身分証明書みせてください」って言われたから入れなかったんだよね。その後にカラオケ行こうってことになってカラオケ行ったら、あたしとか今日来てる子達はお酒注文しなかったんだけどあとの子達は頼んじゃってさぁ・・・。」

そう言われてみれば、AもCもまだ登校してきていなかった。

「マジで飲んだの？」

「そう。そしたらさ、店員が警察に連絡したみたいで、警察来ちゃってさぁ・・・」

「まじで！？やばくね！？」

「そうなんだよぉ・・・。飲んでた子は補導されて、その他は厳重注意でさ・・・。」

「なんで注意しなかったんだよ」

「だって・・・。なんか、言い辛いじゃん。」

「わかるけどよぉ・・・。そこをなんとか止めようぜ」

「・・・反省してる」

顔をうつむかせてそう言う彼女に、Bも申し訳なさそうに謝った。

その日、急遽学校側が飲酒についての話を全校生徒に聞かせた。

Bは思う。

確かに早く堂々と酒が飲める年齢になりたいのもわかる。自分だってそういった場にいたいし、その場の雰囲気味わってみたい。

だけど二十歳を超えればあとはいくらでも飲める。死ぬまで自由に酒を飲むことができる。

それならば制限されている今はある意味貴重なのではないだろうかとも思うのだ。

あと数年の間はあらゆるものから守られて暮らせるが、酒が飲める年齢になれば自分のことは自分でしなけれならぬし、自分の身は自分で守らなければいけない。

自由をもつかわりに、自分はもう保護される側ではなくなるのだ。

いま自分がやるべきことは飲酒や喫煙ではなくて、それが自由にできる年齢に達したとき、それを楽しむことが出来る生活を確保するために頑張ることだ。